めざせ！脱 ALT 依存・教師の意識改革
―英語活動の取り組みを通して―

高崎市立吉井西小学校　校長　片山　和子

はじめに

学校を変える原動力は教師の意識の在り様である。一つのことに向かう時、その意識と協働性にかかっている。たくさんのことはできない。しかし、一つのことに学校全体で「意識が変革」していけば、学校は変容していくものと信じている。そこで、今年度は、意識改革の視点を英語活動にあてて実践してみた。英語活動に視点をあてた理由は以下のようである。

全国的に見ても、国際理解教育の中で外国語活動として英語活動を位置づけて取り組んでいる小学校がほとんどである。これからの学校教育にとって、地球的な視野に立った児童の育成が求められていることはゆるがせない事実であり、そのために「異文化理解を図る上での言語の一つとして」英語活動は着目されてきた。21 世紀の社会を生き、担う存在である児童にとって、外国の文化や知識を得る機会は多くなっている。吉井地域においても、「外国籍」の児童や保護者の存在は年々増加している。国際理解教育の必要性を学校として感じているが、「英語活動」の位置づけはあいまいであり、系統性や有効性から見て、着実な成果を得ないことが多くの学校で課題となっているのも事実である。

本校では、今まで各学年、年間 10 時間程度の「英語活動」に取り組み、児童にとっては「楽しい」1 時間という一定の「成果」はみられている。しかし、1 時間としての「楽しさ」は体験しても、そのことで、コミュニケーション豊かな児童が育てられているかは疑問が大きかった。そこで、これからの時代を担う児童にとって、「異文化を理解し、慣れ親しむツールとしての英語にふれる英語活動」について見直したいと考えた。さらに、23 年度の学習指導要領の完全実施では、5･6 年生は年間 35 時間の外国語活動が位置づけられている。ねらいが示され、教育課程への位置づけが明示されてきた。それも踏まえ、本校での外国語活動（英語活動）への取り組みに改善の必要性が大きいと考えた。

英語活動を進める上での、課題の一つは、教師の意識にある。英語活動の重要性は意識しているが「ALT にお任せ」「指導の方法に自信がない」「英語が話せない」などの意識が小学校での英語活動を進める上での大きな課題である。そこで、移行期のこの時期を担任主体の英語活動への絶好機ととらえ、教師の意識改革につながる職員の協力体制を構築したいと考えた。

Ⅰ　校内研修としての取り組みへの校長としての働きかけ
（英語活動のねらいと目指す児童像の統合）

英語活動に取り組むということは教師にとって、ある意味では「新たなことへの取り組みであり、教師の多忙感」につながる可能性を持っている。そこで、20 年度後半までに、段階的に学習指導要領についての研修を校内で取り組んだ。さらに、学習指導要領の完全実施に向けての移行計画を教務主任に作成させていった。3 年後という先の話ではあるが、目の前に具体的な数値として教育課程の変遷を示されたことにより、英語活動を中心に職員の現実感が増してきた。

その上で、いつか、必ず自分も英語活動を 35 時間指導するという切実感を持たせた。人事ではないと言う感覚は教師一人ひとりが自分のこととして、意識的に動かざるを得ないことにつながる。

その上で、英語活動の推進に当たっては、本校で取り組んできたテーマとの整合性に着目させた。本校では、20 年度までの 4 年間、「自分の思いや考えを進んで伝え合うことのできる子供の育成」をテーマに、国語科を中心に取り組んできた。このテーマは、教師にとって、これからも追求したいテーマであった。

国語科から英語活動という手立てに違いはあるが、育てたい児童の姿の基本はかわらない。つまり、英語活動を通してどんな児童に育てたいのか。そのための手段としての英語活動の意義を確認する場を設けた。このような段階を経て、学校の組織としての取り組みのよさを強調し、校内研修で取り組む雰囲気ができてきた。

前年度の話し合いの中で、方向性が固まり、教員の意識もとにかくやってみようというように変容していった。職員間での調整を十分行うように心がけ、個々の教師の思いを掘り起こす作業・時間を十分とった。その結果、集約された教師の意志「自分達で作り上げる」「柔軟な発想で無理はしないが、ちょっと無理をして」「教師がまず授業作りを楽しもう」が、次の要項「第 1 回校内研修全体会」の要項（資料1）に見られる。

―資料1―

第１回　校内研修全体会　平成21年　4月13日（月）

１．学校長より

２．昨年度までの研修の流れ
　※昨年度末の校内研修資料より（別紙資料参照）

３．本年度の研修について

（１）今年度の研修テーマ・研修内容について

昨年度職員アンケートの結果から

子供たちに身に付けさせたい力	教科
①　自分の思いや考えを進んで伝える力、伝えようとする力	英語
②　言葉や考えを伝える力	
③　積極的に人とかかわろうとする力	
④　コミュニケーション能力	
⑤　自分の思いを表現する力	
⑥　相手の思いを理解する力	
⑦　幅広くいろんな人と関わり合おうとする力	

【今年度のテーマやサブテーマ】

自分の思いや考えを進んで伝え合うことのできる英語活動の工夫
〜コミュニケーション活動に視点を当てて〜

文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官　管　正隆

〇コミュニケーションという土壌を耕し、種をまくのが小学校、中学校では水をやり、高校では肥料を与える。
〇形成的評価（〜できる）ではなく、意欲面・情緒面（〜しようとしている）を評価する。
〇教えるのではなくやる気をおこす土壌を作る。
〇活動するのは子供であり、線路を引いてやるのが、教師である。あくまで子供中心の授業。
〇文字は本から学べるが、使い方は人と交わって覚える。伝えたいという気持ちがあれば単語表現が定着する。

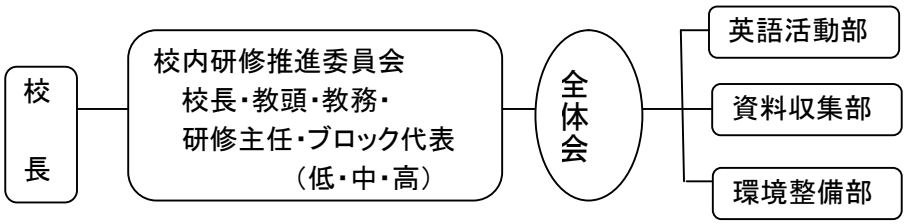
Ⅱ　組織的な動きへ

１　校内研修の構想

（１）年度当初の学校組織に「英語活動への意識改革」を意図した組織作り

学校組織は、学校全体の現状と課題を解決するために作られるのは当然である。学年を誰が担当するか、分掌や教科主任とのかかわり、人を育てるという観点は欠かせない。最終的

なねらいは目指す児童の育成に最良である組織作りはいうまでもない。今年度は、それを踏まえた上で、研修体制では、どの教師も自分の役割を分担し、協力し合う体制作りのために、下図のように組織した。さらに英語活動における教師の意識改革という視点で英語活動の核となる教師〈下記表＿の教師〉の学年ブロック配置を考慮した。



【部会構成メンバー】◎は部長

	低学年		中学年 校内研修主任 K・K		高学年		担任外
英語活動部	K・K	◎M・Y	F・A	T・E	◎A・Y	W・M	
資料収集部	I・H		K・T		E・M		◎A・K／I・T
環境整備部	M・H				H・J		◎Y・H／Y・K

（2）見通しと心的なゆとりの見える計画

※出来るだけ近い時期に授業研究を2つ組み、授業検討会は1回で2学年分行う。

行事や学年の実態を見て、無理に計画しない。

授業形態は、ALT と一緒でも HRT でもどちらでも OK

授業研究会はワークショップ形式で

見取りの視点の明確化（4つの観点で）

付箋紙を使うことで、個の意見や考えを明確に

—研究計画—

	研　　修　　内　　容
4月	今年度の課題と研究の方法の検討，研究テーマづくり
5月	研究テーマ・サブテーマ決定，研究授業計画，班別会議　※5／20　年度始訪問
6月	**＊授業研究（第5学年）（第6学年）**
7月	夏季休業中の研修について，学年・ブロック・班別研修
8月	学年・ブロック・班別研修，新学習指導要領に伴う年間指導計画作成
9月	**＊授業研究（第2学年）**
10 月	**＊授業研究（第3学年）（第4学年）**
11 月	**＊授業研究（第1学年）**会報づくりに向けて，学年・ブロック別授業研究のまとめ
12 月	各クラスでの取り組みについて（児童の実態と変容，成果と反省など）
1月	会報原稿の検討，学年・ブロック・班別研修（各部での作業）
2月	今年度の研究のまとめと今後の課題について　※2／12　年度末訪問
3月	次年度の研修に向けて

（3）意識改革の根っこは、英語活動で目指す児童の姿の共通理解（ブロックでの話し合いを生かし、自分達で練り上げる）

学年ブロック	活動の目標	具体的な児童の姿
低学年	慣れる	・英語を聞こうとする。 ・英語を聞いて、動こうとする。 ・英語を聞いて、まねして言おうとする。
中学年	慣れ親しむ	・相手と向かい合って、聞いたり話したりしようとする。 ・間違いを恐れずに英語でコミュニケーションを図ろうとする。 ・相手の伝えたいことを分かろうとする。 ・相手のしていることや言っていることをまねようとする。
高学年	慣れ親しみ 伝え合う	・積極的に自分の思いを伝えることができる。 ・相手の思いを理解することができる。

全体会で検討
変更

学年ブロック	活動の目標	具体的な児童の姿
低学年	ふれる	・歌やゲーム等を通して英語を楽しもうとする。 ・英語を聞いて、全身で表現しようとする。
中学年	慣れ親しむ	・歌やゲーム・簡単な会話等を通して異文化を体験し、興味をもとうとする。 ・英語を聞いたり、話したりする活動に慣れ親しみ、間違いを恐れずに自分の思いや考えを伝えようとする。
高学年	伝え合う	・歌やゲーム・簡単な会話等を通して異文化への興味・関心を深めようとする。 ・これまでの英語活動の経験を生かし、簡単な英語を使って、自分の思いや考えについて積極的に伝え合おうとする。

【授業作りの視点】

① 授業の目的（めあて）を明確にした学習活動を仕組む。
② 人（友達・ALT・教職員など）と必然的にかかわる活動を仕組む。
③ 自己選択・自己決定のある学習活動を仕組む。
④ 国際理解の視点のある学習活動を仕組む。
⑤ 体験的な活動のある学習活動を仕組む。

2 学級担任が主体となる授業作りへ（目指せ！脱 ALT 依存・教師の授業作りの変革）

23年度の完全実施に向けて、高学年の35時間移行をスムースに行う上で年次計画を段階的に作成。1年か

ら英語活動に取り組む。内容・時数については、弾力的に。このことは、英語活動への意識のみならず、総合的な学習の時間や学年の年間計画をどう構築し直すかという動きにつながっていった。

（1）時間割の工夫と週計画表における ALT との打ち合わせの時間の工夫

教師にも暖機運転が必要である。そこで、今年度は時数が増えても ALT との授業時間を可能な限り増やしたいと考えた。本校の ALT は中学校から派遣されてくる。したがって、週1回の来校であった。中学校と折衝した結果、火曜日１日と木曜日の半日の来校が可能となった。21年度の基本的なすすめ方を【今までの授業スタイルを踏襲しつつ、22年度に向けて「担任だけの授業への移行・英語ボランティアの導入」】を考えて進めている。

時数の多い学年を中心に英語活動の時間割を設定し、ALT との打ち合わせの時間を週時程表に位置づけた。指導プランをもとに児童の学習活動を実際にやりながら、その時々に必要な言葉がけなどを打ち合わせ、担任とALT が互いに楽しみながら取り組んでいる姿が多く見られるようになった。

（2）教師の「なれ」は授業をすることで

参観してもらうことは≪教師の意識≫を変える一つの手段であり、なすことによって学ぶことが大きい。また、全員で同じ経験を積む中で、共通の悩みや学校としての課題解決も見えてくるものである。本校では、一人3授業公開を実施しているが、本年度は、そのうち1時間は英語活動をするという方針を示した。全担任が、英語活動を1回は公開授業として取り組んでいる。教師も人の子。授業で、自分が主体となって取り組むことによって、≪英語活動≫をする経験を重ね、抵抗感を取り除き、手ごたえを感じることができる。互いに見合うことで、授業での成果や子供の楽しんで変容する姿を通して、教師も≪楽しさ≫を体感できるであろうという思いが根底にある。

（3）授業作りのスタイルは指導案のスタイルから（誰でも取り組める授業作りの提示・段階的に学級担任主導の英語活動へ）

英語活動の具体的展開(授業づくり（授業実践例Ⅰ）

英語活動学習指導案　　平成21年6月23日（火）第2校時

5年1組（5年1組教室）　指導者　〇〇〇〇　ALT　　〇〇〇〇

1　単元名 「外来語を知ろう」

主な言語材料：　What do you want ？　　～ , please.果物や野菜，動物，スポーツなどの簡単な外来語

2　目標

〇外来語とそのもととなる語との発音の違いに気付き、英語の音に気をつけて発音しようとする。

〇自分の欲しい物を言ったり相手に欲しい物を聞いたりする活動を通して，友達とのやりとりを楽しみ，進んで思いを伝え合おうとする。

3　評価規準

評価の観点	評　価　規　準
言語活動への関心・意欲・態度	・歌やチャンツ，ゲームなどを楽しみ，友達と英語で交流しようとしている。

コミュニケーションへの積極性	・自分の欲しい物を言ったり相手の欲しい物を聞いたりして，進んでやりとりをしようとしている。
言語や文化への気付き	・外来語と，そのもととなる語との発音の違いに気付き，英語の音に気をつけて発音しようとする。

４ 準備

教師：果物の絵カード(チャンツ用：banana，apple，strawberry，kiwi，cherry，pineapple，peach，melon，lemon，grapes)，果物の絵(パフェにはる物と同じ絵：掲示用，児童用)，パフェの容器のシート(掲示用，児童用)，リズム楽器，タイマー，振り返りカード

児童：探険ボード，筆記用具，のり

５ 展開

過程	児童の活動	学級担任（HRT）の活動	ＡＬＴの活動	●指導上の留意点 ◎評価の観点 ○国際理解の視点
つかむ 10分	１ Greeting ・あいさつ ・天気、曜日 ・Song ♪Head Shoulders～	・全体にあいさつをする。 ・楽しく歌えるように活動をリードする。	・全体にあいさつをし、気分や天気、曜日を聞く。 ・児童と一緒に楽しむ。	●笑顔であいさつできるようにする。
	２ チャンツ①をする。 ・発音に気をつけて担任やＡＬＴのあとに続いて言う。	・果物の絵カードを見せながらチャンツをする。 HRT：バナナじゃなくて＊＊ ALT：banana＊＊ STU：banana ・２回目は、担任と児童だけで言う。 HRT：バナナじゃなくて＊＊ STU：banana		●絵カードを次々と見せながら、テンポ良くチャンツを言う。また、正しい発音で言う意識をもたせる。
	３ チャンツ②をする。 ・リズムに合わせて一緒にする。	・果物の絵カードを見せながらチャンツをする。What do you want？と聞くグループと、ＡＬＴの出した絵カードを見て Banana，please. と答えるグループとに分かれてする。全部のカードをやったら交代する。 Gruop１：What do you want？ ＊＊ Group２：Banana，please. Group１：What do you want？ ＊＊ Group２：Kiwi，please.		●児童の様子をみながら速さや回数を調節する。
学び合う 30分	４ 「パフェ作り」をする。(25分) ・店員と客に分かれてする。前半と後半で交代する。 ・店は６カ所。店員２～３人ずつ。	・自分のオリジナルパフェをお店で作ってもらう活動をすることを言い、活動の仕方をデモンストレーションで示す。デモンストレーションは、初めに悪い例を見せ、次に良い例を見せる。 ・児童の活動中は、担任とＡＬＴは戸惑っている児童の手助けをする。 ・児童の様子によっては、前半の途中で、「英語の言い方がわからなくて言えなかった言葉」がなかったか聞く。英語の簡単な言い方をＡＬＴに聞いて教え、続きの活動で使ってみるように言う。 【予想される言い方】 もう一つください。（One more，please.） バナナを二つください。（Two bananas，please. またはBanana. Two，please.やBanana,please. Two，please．でもよい。） いくつほしいですか？（How many？） もういいです。（OK．）		○デモンストレーションでは、悪い見本もやって見せ、笑顔やアイコンタクト、あいさつ、お礼の大切さに気づかせる。 ●英語での言い方がわからないときには、いつでも担任やＡＬＴに聞いていいことを伝え、児童が安心して活動できるようにする。

	 ５　自分のパフェを紹介する。 （５分） ・６つのグループに分かれてする。 （各４～５人）	①店員と客に分かれる。 ②店員は、客に欲しい物を尋ね、客は自分の欲しい果物を言う。 客　：Hello. 店員：Hello.　What do you want ? 客　：Banana，apple and strawberry，please. ③店員は果物の絵をパフェシートにのりで貼って、客に渡す。 店員：Here，you are. 客　：Thank you. 店員：You are welcome. ④時間になったら、店員と客を交代する。 【注意】１つの店でもらえるのは、２種類の果物のみ。ただし、“bananaを２つ”のように、１つの種類を２つまでもらってもよい。２種類もらったら、他の店へ行って欲しい果物を言う。店はいくつ行ってもよい。 ・自分のパフェを友達に紹介することを言い、やり方をデモンストレーションで示す。 ・児童の活動中は、担任とＡＬＴは戸惑っている児童やグループの手助けをする。	◎コミュニケーション 自分の欲しい物を言ったり相手の欲しい物を聞いたりして、進んでやりとりをしようとしている。 （観察・振り返りカード） ●英語でうまく紹介できない児童に対しては、担任やＡＬＴが言い方を教えたり、一緒に言ったりする。
深める５分	６ Greeting ・振り返りをする（振り返りカードを書く） ・あいさつをする	Ｓ１：This is my parfait. I like banana,apple, pineapple, cherry and melon. Ｓ全：Good！（Nice！，Delicious！，clap，etc.） ・児童のよかったところを言う。 ・あいさつをする。	●児童の意欲につながるように、よかった点を知らせる。

（授業における成果と課題）

６　成果と課題

〇必然性をもたせた学習活動により，児童が生き生きと楽しく参加していた。

〇チャンツが効果的で，外来語と，そのもととなる語との発音の違いに気付きながら発音練習ができた。

〇担任とALTとの役割分担については、事前に十分な打ち合わせをすることが今後ますます必要である。授業の打ち合わせをする際には、担任が主になっていくという視点とねらいを達成するために、ALTに要求している役割を明確に伝えることが肝心である。そのための教師のコミュニケーション力を培っていきたい。

（4）教師一人ひとりが課題意識を持てる授業検討会の持ち方の改善

授業を創る力を高めるためには、授業を見る目を養い、評価し、自分のものにする力量が求められる。授業検討会をそういう場にする必要がある。そこで、持ち方を改善した。

個が意見をもたざるを得ない、課題意識を持って授業研究をとらえるために、ワークショップ形

式で、小分科会で行う。話し合う視点を授業改善の視点として事前に明確にしておく。小分科会では、授業改善の視点をもとに話し合う。授業参観時に気付いたことをその都度メモしていった付箋紙を活用し、よさと課題点を個々に発表しあう。出されたことは、全体会で確認する。このことにより、互いの気づきから授業を見る目を高めることにつながる。評価という中で指導のよさを認め、課題を確認しあえ、教師の意欲と意識を重ねていくことができる。

≪授業研究会のワークシート例≫

本時の授業改善の視点は

チャンツや様々なゲーム（集中力ゲーム・キーワードゲームなど）を通して本時の表現 When is your birthday? My birthday is～を数多く聴いたり話したりすれば、その表現になれ、同じ誕生日の友達を探す活動で、伝え合えた（相手に伝わった・相手の言っていることがわかった）というという達成感や成就感を味わい、進んで思いを伝え合おうとすることができるであろう。

児童	教師

◎ ワークシート

Ⅳ 脱 ALT 依存への道筋

本校では、ALT に依存せず、学級担任が一人でも授業を充実させる力を持つことが目標である。そのためには、教師自身の自信が必要である。今は、過渡期である。ALT を活用することで活動が活性化できているのも事実である。そこで、ALT との授業を重ねる中で、担任主導の学習作りを模索し、「なれ」の時間を重ねている。一方、ALT との授業作りと平行しつつ、言葉の壁の少ない JET の活用開発も、今後の脱 ALT の一方策である。

担任は児童の様子を見ながら、学習をリードしていく。
ALT はネイティブな発音をリードする。

（1） 言葉の壁の少ない JET の活用開発

担任が中心となって授業を実施するために、授業をサポートしてくれる学習支援ボランティア（JET）を募集した。現在2名の JET が得意の英語を生かし、ネイティブに近い発音を中心にしながら、授業に参加してくれている。打ち合わせが日本語ででき、担任の意思をより明確に伝えることができるという点と、学級担任の「英語の発音」への抵抗感を和らげる意味で有効である。さらに、地域の人材を生かすことで、教師の意図する多様な活動形態を可能にし、児童のコミュニケーションの場を増やすことができた。

（2） 教材教具の開発・活用能力の育成

現在、「人」に頼る部分が大きい。人的な体制が整備されなくてはできないという意識が教師にはまだ強い。高崎市では電子黒板の導入が1月には計画されている。ICT を活用する利点は≪英語活動≫においても期待される。DVD などを生かす形での授業作りも今後視野に入れて、研修を重ねていきたい。機器を有効に授業に取り入れることは、自分に欠けるものを補い、児童の興味・関心・意欲を高める部分を担うことにつながる。これからの教育を進める上で、他の教科等においても有効な手立ての一つであることを考え、英語活動での導入を試みていく。使うことで、その有効性を実感し、スキルを磨いていけば、ICT を活用した教科等の授業作りへの抵抗感の減少という意識の変容へとつながる。

Ⅴ 教師の主体的な研修からの意識変革と環境構成

子供の英語活動に対する興味・関心を高め、充実させるには、職員の研修が欠かせない。今までに以下の研修を行った。その中で、各研究部の仕事環境構成に部員の自発性が増している。

（1）県総合教育センター長期研修員経験者による自前の研修報告会

本校在籍職員の中に、昨年度長期研修員経験者がいる。仲間から学ぶことは、気軽に聞きあい、現場に密着した研修になる。（今後の英語活動の動向や研修報告）

（2）西部教育事務所の要請訪問の活用（英語活動のすすめ方）

（3）気軽に授業実践

一人3授業公開の中で、1回は英語活動を公開。まず、取り組んでみようということで、単発ではあるが、JET との授業に適した題材を開発し、実践する学年が見られた。

長期研修員経験者を講師に

（4）英語活動に関する講演会等への参加

英語活動への抵抗感の強い教員や研修の機会の少ない教員への意図的な参加指示

（5）先進校研究授業参観とその報告・資料の回覧

（6）教材は学校の財産という意識（英語カードの整理・整頓・蓄積・そのための方策の部会での取り組み）
（7）コミュニケーションのツールとしての「英語」の日常化
環境整備や言葉にする環境構成（季節を感じる英語での掲示物・放送委員会の挨拶など）
（8）年間指導計画の見直しと来年度の準備（教務主任と校内研修主任との連携）

これら取り組みの中で、悉皆の出張以外に、各種研究会等への職員の自発的な参加を希望する機会が増えている。

放送委員会児童「Good Morning　It's Monday……」
トンボは英語で dragonfly って言うんだ！

Ⅵ　まとめ

脱 ALT 依存！は教師の意識改革のための方策の一つである。ALT の必要性を排除するものではない。ALT の活用すべき場とそのよさは高い。「学校」で取り組む英語活動は、ALT も役割を果たせたという実感をもてなければ、国際理解教育と相反するものになってしまう。しかし、今後の英語活動の充実と ALT の配置減は現実に目の前の事実である。

子供をよりよく変えるためには、学校・教師が変わることである。日々同じことの踏襲は、社会や学校、児童の実態を見ていないことである。体制の不備から、これしかできないのではなく、子供の成長のためには、「今これをすることが必要だ」と考えられるかである。違う体制を作ればよいのである。地域にはそれをサポートする「人」がいるかもしれない。人がいなければ、機器を使うことで補完できないか。自分の力を高める努力をする。そうでなければ、子供の未来を創ることはできない。教育が変わる根っこは、「教師の意識の変革」である。そのための一歩が、英語活動を通して、前に進んでいるという手応えを感じている。

教師自身が英語活動をどう展開するか自分で考え、意欲的に取り組んでいる姿がある。それは、授業検討会での発言や笑顔で授業に取り組む姿に、また、打ち合わせのときの英語活動を ALT と作っていく様子からも感じられる。自分がしなければという意識改革は少しずつ実を結びつつある。

子供が「楽しさ」を体感し、英語を通して人格を形成していくことをねらいとする英語活動の推進のために、ALT の必要性とその意義を互いに感じられる授業をこれからも作っていく。また、一方で、学級担任が自信を持って、子供と共に作り上げる英語活動を推進していきたい。そして、そこに生まれた教師の意識改革が、学校全体を活性化する動きにつながることをさらに求めていきたい。

参考資料　文部科学省刊行：小学校英語活動研修ガイドブック
文部科学省平成20年3月告示：小学校学習指導要領